「『大正新脩大蔵経』底本・校本データベース」の活用事例

―大正蔵の「宮本」採録をめぐって―

會　谷　佳　光

はじめに

『大正新脩大蔵経』（以下「大正蔵」と略す）は、1922～34年に近代活字を用いて日本で出版された一大仏教経典叢書であり、正蔵55巻、続蔵30巻、別巻図像部12巻、『昭和法宝総目録』３巻の全100巻からなり、3,493部13,520巻の仏典を収録する。その底本には、増上寺三大蔵経のひとつ高麗再彫本（以下「麗本」と略す）が使われ、校本として増上寺の宋思渓版大蔵経（以下「宋本」と略す）、元普寧寺版大蔵経（以下「元本」と略す）をはじめ、宮内省図書寮の福州版大蔵経（以下「宮本」と略す）、正倉院の聖語蔵（以下「聖本」と略す）、大英図書館やフランス国家図書館等の敦煌文献等が用いられた。こうして出版された「初版」に対して、1960～79年に誤脱等を補訂して「再刊」がなされ、1988～92年には、再刊時に作成された正誤表の一部が取り込まれた再刊を原本とした「普及版」が刊行された(1)。その後、大正蔵は、WEB上のテキスト・画像データベースなど様々な形に変化しながら、仏典のスタンダードテキストとして、これまで世界中の研究者を裨益してきた。

大正蔵の編纂に用いられた底本・校本について知るには、各仏典の脚注に記載された校勘記を見るのが一般的な方法であるが、このほかにも『大正新脩大蔵経勘同目録』（『昭和法宝総目録』第１巻所収。以下「『勘同目録』」と略す）に記載される大正蔵の底本・校本に関する項目が存在する。しかし、このことは、近年十分には認識・活用されてこなかった。『勘同目録』は長所と短所が混在する資料であり、脚注に記載される底本・校本に関する情報との間に少なからぬ異同がある。そこで筆者は、

『勘同目録』をより有効に活用するため、『勘同目録』と脚注の記録する底本・校本の情報を対照した「『大正新脩大蔵経』底本・校本データベース」（以下「本データベース」と称す）を構築した(2)。

本稿では、本データベースを紹介するとともに、その活用事例として、宮本の採録状況をめぐる問題とその発生原因を究明することを通して、大正蔵の編纂をめぐる問題の解明に迫ってみたい。

1　「『大正新脩大蔵経』底本・校本データベース」について

本データベースは、2018年度に採択された科学研究費基盤研究（C）「『大正新脩大蔵経』編纂の実態に関する書誌学的研究：増上寺報恩蔵本を通して」（18K00073）の研究活動の中で着想を得て、データを作成するとともにデータベースの構想を練り、東京大学史料編纂所助教中村覚氏の技術協力のもと、データベースの構築を進めたものである。2021年度には、これを活用・拡充するために、基盤研究（A）「漢文大蔵経の文献学的研究基盤の構築：『大正新脩大蔵経』底本・校本DBの活用と拡充」（21H04345）を獲得して、システムの整備と高精細画像への差し替えを行った上で、2021年７月６日に一般公開した（https://static.toyobunko-lab.jp/taishozo/）。さらに2022年11月には、画像データや書誌データ等の追加を行ってリニューアル公開した。

本データベースの核をなすのは、『勘同目録』と大正蔵第１～55巻（漢文部分）の脚注に記載される大正蔵の底本・校本に関する情報であり、これらを対照させて一覧化した点に特徴がある（【図１】）(3)。

まず基本情報として、「SAT大正新脩大蔵経テキストデータベース2018版（SAT2018）」（http://21dzk.l.u-tokyo.ac.jp/SAT/）から、経典番号、仏典名等に関する情報をコピーした上で、収録巻次、部門、および大正蔵各巻の奥付より配本順次、出版年月日に関する情報を収集して記載した。2022年度のリニューアルでは、鎌田茂雄ほか編『大蔵経全解説大事典』（雄山閣、1998年８月）によって、あらたに仏典の別名・巻数・訳著者名を追加した。

『勘同目録』には７つの著録項目があり、そのうち底本・校本にかかわる「❹原本及校本」「❼備考」を対象に、「底本／校本」「❹」「❼」「❼備考」の４欄に分けて記載した。「底本／校本」欄には底本・校本の別を記載し、「❹」欄には「❹原本及校本」の情報を記載し、「❼」欄には「❼備考」のうち底本・校本の書誌に関する詳細情報を記載し、「❼備考」欄には「❼備考」のうち底本・校本に関する欠本等の補足情報等を記載した。

脚注については、大正蔵の第27回配本と第28回配本を境に、編纂方針の転換がなされているため(4)、これに合わせて第27回配本以前と第28回配本以降で記載方法を変更した。すなわち第１～27回配本分では各巻全頁の脚注を対象に底本・校本の略号を収集し、「底本／校本」「テキスト」「備考」の３欄に記載した。第28～55回配本分では各仏典の冒頭の脚注に記載される底本・校本情報を記載するとともに、第１～27回配本分と同様に、各巻全頁の脚注を対象に底本・校本の略号を収集し、「底本／校本」「《新添部分》」「テキスト」「備考」の４欄に記載した。「テキスト」欄に「〔　〕」付きで記載されるものは、脚注に底本・校本が明記されず、『勘同目録』や他の脚注によって補足したものであることを示す。脚注で�原・㊥・㊁等、不特定のテキストを表記するための略号が使われている場合は、「《新添部分》」欄に略号を記載し、「テキスト」欄に書誌情報を記載した。「備考」欄には、脚注に記載される底本・校本に関する欠本情報等を記載した。

底本・校本のデータは、原文の表記ゆれ等により、遺漏なく検索結果を得られない場合がある。そこで、各テキストに対して標準名称、刊写にかかわる国・時代・年（西暦）・刊行者・刊写の別・所蔵者等の情報を詳細情報として追加することで、検索・利用しやすいようにした（【図２】）。なお、刊写年等は大正蔵各巻の巻末に掲載される「略符」に依拠して記載したものであり、必ずしも正確ではない。今後、原典調査によって書誌情報を追加してデータを補正する予定である。

「基本情報」の「経典名」欄より、「SAT大正新脩大蔵経テキストデータベース2018版（SAT2018）」（既出）の該当仏典の冒頭を参照できるようにした。また、『勘同目録』の初版（家蔵）をデジタル撮影してIIIF(5)

化を行い、本データベース「詳細情報」の「勘同目録所在」欄より、『勘同目録』の該当箇所の画像を閲覧できるようにした。さらに、大正蔵の底本・校本に採録された酉蓮社本(6)をスキャニングしてIIIF化を行い、本データベース「脚注」の「テキスト」欄に表示したIIIFマークより、酉蓮社本のIIIF画像を閲覧できるようにした。また、「脚注」の「テキスト」欄に表示したテキスト名より、「酉蓮社（旧増上寺報恩蔵）蔵嘉興版大蔵経目録データベース」(https://static.toyobunko-lab.jp/u-renja/。以下「酉蓮社本目録データベース」と称す)(7)の「書名目録」に登録した該当仏典に遷移できるようにした。

『勘同目録』・脚注はそれぞれ一長一短のある資料であるが(8)、大正蔵を利用して仏教研究を行う者は、本データベースによってこれを横断検索できるようになった。これによって、双方の欠点をカバーし、かつ比較対照しつつ、底本・校本の情報を知ることができる。

本データベースは、これで完成ではなく、漢文大蔵経の文献学的研究基盤の構築を目指し、下記のとおり書誌・画像・テキストデータやデータベースシステムの拡充を不断に進めている。

【書誌調査・解題・目録の作成・公開】

大正蔵の底本・校本に実際に用いられたテキストのうち、大学所蔵本約340点(9)を対象に、現物の書誌調査を行い、書誌情報をデータベース化して本データベースに連携して公開する。

大蔵経の目録情報をもとに目録データベースを作成して、本データベースに連携して公開する。すでに連携を実現している「酉蓮社本目録データベース」のほか、2022年度のリニューアルでは、「宮内庁書陵部収蔵漢籍集覧」にて公開されている宮本の全文影像データベースとの連携を行い、本データベースから宮本の画像を表示できるようにした（次節にて詳述）。

【酉蓮社本の撮影とIIIF規格での公開】

酉蓮社所蔵の嘉興蔵の正蔵1,418冊を対象に、8000万画素のカメラを使ってデジタル撮影してIIIF規格で公開する(10)。2022年度のリニューアルでは、2021年度に撮影した335点33,330コマ（全42函309冊）の画像データを新たに公開した。「酉蓮社本目録データベース」では、従来より「書

名目録」（仏典単位の書誌データ）で画像を表示することができたが、新たに「所在」（函・箱・冊からの絞り込みページ）において各冊の画像データを表示できるようにし、「詳細目録」（巻単位の詳細データ）において各巻の画像データを表示できるようにした。

2021年１～３月、SAT大蔵経テキストデータベース研究会が酉蓮社本『放光般若波羅蜜経』等73冊のデジタル化を実施し(11)、同年９月、IIIFに準拠した「酉蓮社所蔵　万暦版大蔵経（嘉興蔵）」サイトを公開した（https://dzkimgs.l.u-tokyo.ac.jp/omekas/s/yurenja_kkz/page/view）。

そこで、SAT大蔵経テキストデータベース研究会がすでに撮影・公開した仏典は重複して撮影せず、2022年度のリニューアルの際にデータベース連携を行って、本データベースでもSAT撮影の画像を表示できるようにした。

【TEIテキストの作成】

酉蓮社の嘉興蔵の一部を対象に、TEIガイドラインに準拠してXML形式でデジタルテキストを作成する(12)。さらに、IIIF画像と連携して、大正蔵その他のテキストと比較して機械的に校勘記を作成するシステムの構築を目指す(13)。

【レビューの収集】

本データベースのトップページに設けたユーザー投稿フォームから利用者のレビューを収集してデータベースの改修に活用する。

これらの計画を進めることによって、大正蔵の底本・校本関連情報に加え、それらの原本画像・デジタルテキスト・書誌情報等へのアクセスを容易にし、研究効率の向上を実現し、ひいては仏教研究の発展に貢献していきたいと考えている。

次に、本データベースの利用方法について理解を深めるため、本データベースを使って大正蔵の底本・校本の採録状況を調べてみたい。

検索画面の左側には、複数のファセット検索(14)を設けてあり（【図３】）、これらを組み合わせることで絞り込み検索が可能となる。

基本情報-経典番号：大正蔵の経典番号で絞り込む。

基本情報-巻数：大正蔵の収録仏典の巻数で絞り込む。

基本情報-訳著者：大正蔵の収録仏典の訳著者で絞り込む。
基本情報-収録巻次：大正蔵の収録巻次で絞り込む。
基本情報-部門：大正蔵の部門（分類）で絞り込む。
基本情報-配本：大正蔵の初版の配本順で絞り込む。
勘同目録-底本/校本：『勘同目録』に記載される底本・校本で絞り込む。
勘同目録-テキスト：『勘同目録』に記載されるテキストで絞り込む。
脚注-底本/校本：脚注に記載される底本・校本で絞り込む。
脚注-テキスト：脚注に記載されるテキストで絞り込む。
画像：画像の有無で絞り込む。

この中から「勘同目録-底本/校本」と「脚注-底本/校本」をクリックすると、『勘同目録』・脚注それぞれの底本・校本の件数を表示できる（【図４】）(15)。

底本・校本の件数	底本	校本	小計
勘同目録	2,335	6,438	8,773
脚注	2,335	6,222	8,557

【図４】の「勘同目録-底本/校本」の「なし」は、脚注に採録されているのに、『勘同目録』に記載がないものの件数で全500件あり（脚注中の「未収」（次節にて詳述）595件を除く）、「脚注-底本/校本」の「なし」は、『勘同目録』に記載があるのに、脚注に採録されていないものの件数で全712件あり、いずれも校本である。『勘同目録』と脚注の間にこれほど大きな相違があることは、これまで指摘されておらず、本データベースを構築したことによってはじめて明らかになった問題である。大正蔵をより有効に活用するためには、この相違が生じた要因を究明しておく必要がある。

次に、本データベースを使って、大正蔵の主要な底本・校本の採録状況を調べてみたい。

「勘同目録-テキスト」、「脚注-テキスト」をクリックすると、【図５】【図６】のようになる。上位4件は麗本・宋本・元本・明本であり、いずれも1,000件を超えている。

麗本は高麗再雕本、宋本は宋思渓版大蔵経、元本は元普寧寺版大蔵経であり、いずれも徳川家康が増上寺に寄進した所謂「三大蔵経」である。明本は明版の大蔵経である嘉興蔵[16]を指す。大正蔵の脚注では、これら宋本・元本・明本を「三本」と合称する（【図７】）。

大正蔵における麗本・三本の採録件数は、『勘同目録』では、底本で2,335件中1,645件、校本で6,438件中4,217件を占め、脚注では、底本で2,335件中1,613件、校本で6,222件中4,182件を占めており、大正蔵の底本・校本の大多数が増上寺の三大蔵経と、明本で構成されていることがわかる。なお、この「明本」は、三大蔵経とともに増上寺の閲蔵亭にて校合されたと伝えられていることから[17]、底本・校本の７割近くが増上寺所蔵本であったことになる。

２　本データベースから見た大正蔵の宮本採録状況

大正蔵の底本・校本に用いられたテキストで、麗本・三本に次いで多いのが「宮本」である。「宮本」とは、宮内庁書陵部（旧称「宮内省図書寮」）所蔵の宋版一切経に対する大正蔵の略称である。以下に、「宮内庁書陵部収蔵漢籍集覧」に登録されている書誌情報を挙げる（https://db2.sido.keio.ac.jp/kanseki/T_bib_body.php?no=007075）。

［大蔵経］（或称一切経）1454種5733巻　附字函釈音532巻　唐　特大6264帖
　　［北宋末］刊（福州東禅等覚院　開元禅寺）［南宋後期］修
　　京都西山法華山寺　石清水八幡宮旧蔵

「宮内庁書陵部収蔵漢籍集覧」は、2012～2016年度科学研究費補助金・基盤研究（A）「宮内庁書陵部収蔵漢籍の伝来に関する再検討―デジタルアーカイブの構築を目指して―」（研究代表者：住吉朋彦、24242009）、および2020～2024年度基盤研究（A）「江戸幕府紅葉山文庫の再構と発信―宮内庁書陵部収蔵漢籍のデジタル化に基づく古典学―」（同上、20H00013）等による研究成果の一部であり[18]、筆者も研究分担者として参加し、宮本の書誌作成を担当した。

宮本は、宋代に開版された２種類の大蔵経からなる。ひとつは、北宋神宗の時代、唐末以来仏教が盛行した福建において、慧空大士冲真等の発願によって福州の東禅等覚院で開版され、30余年後の徽宗の時代に完成した大蔵経で、これを「東禅寺版」という。もうひとつは、東禅寺版の完成と入れ替わるように、本明禅師の発願によって福州の開元禅寺で開版され、約40年後の南宋高宗の時代に完成した大蔵経で、これを「開元寺版」と言う。この２種類の大蔵経は、日宋・日元貿易により多数日本に伝来したが、現存すべてが両蔵の混合蔵である。宮本は両蔵の補刻・続刻部分を含む南宋後期印の混合蔵で、経典単位、巻単位の混合のほか、張単位での混合も見られる(19)。【図８】は、宮本の「書誌書影」の１例である。

次に、本データベースを使って、宮本の採録状況を調べると、下表のとおりとなる（【図９】【図10】）。

宮本採録状況	底本	校本	小計	脚注「未収」	勘同目録「なし」
『勘同目録』	2	825	827	4	−
脚注	2	828	830	−	8

このなかには宋版一切経所収本以外の書陵部蔵本を採録したものも含まれている。底本２点のうち、T1798『金剛頂大瑜伽秘密心地法門義訣』は日本の正応４年（1291）刊本であり、脚注の校本のうち、T1703『金剛般若波羅蜜経註解』（日本康暦２年（1340）刊本）、T1799『首楞厳義疏注経』（日本暦應２年（1339）高師直刊本）、T1804『四分律刪繁補闕行事鈔』（宋紹興３年（1133）刊本）、T1805『四分律行事鈔資持記』（宋本）、T1958『安楽集』（日本寛元３年（1245）往成刊本）、T1985『鎮州臨済慧照禅師語録』（未詳。脚注に「宮内省図書寮蔵本」とあるのみ）、T2008『六祖大師法宝壇経』（写本）の７件は、いずれも宋版一切経所収本ではない。

「脚注「未収」」は、『勘同目録』に採録されているにもかかわらず、脚注に宮本が出てこない仏典であり、T0718『仏説分別縁生経』、T0755『仏説浄意優婆塞所問経』、T0844『仏説大方広未曽有経善巧方便経』、T0903

『都部陀羅尼目』の４件が該当する。これらはいずれも文字数の少ない仏典のため、単に底本との間に異同がなかった可能性も考えられる[20]。

これとは逆に、「勘同目録「なし」」は、脚注に採録されているにもかかわらず、『勘同目録』に採録されない仏典であり、T0238『金剛能断般若波羅蜜経』、T0242『仏説遍照般若波羅蜜経』、T0328『仏説須頼経』、T0331『仏説無畏授所問大乗経』、T0752『仏説五無返復経』、T0879『金剛頂瑜伽三十七尊礼』、T0882『仏説一切如来真実摂大乗現証三昧大教王経』、T2087『大唐西域記』の８件が該当する。

件数が『勘同目録』と脚注で異なる理由は、上記の「脚注「未収」」４件（これを小計から差し引くと『勘同目録』は823件）、「勘同目録「なし」」８件（これを小計から差し引くと脚注は822件）の差異が原因であるが、差し引きすると『勘同目録』がまだ１件多い。それは、T2026『撰集三蔵及雑蔵伝』について、脚注では宮内庁書陵部蔵の五山版（「五山版宮内省図書寮蔵本」）となっているのを、『勘同目録』では「宮本」としているためである。この誤差を修正すると、822件で一致する。

「宮内庁書陵部収蔵漢籍集覧」では、アドビ社Flash Playerのサービス終了を受けて、2021年度に画像データをIIIF規格に移行した。これに伴い、宮本の目次データを作成し、2022年１月にIIIF規格でリニューアル公開した。かつ宮本の画像URLを「SAT大正新脩大蔵経テキストデータベース」（https://21dzk.l.u-tokyo.ac.jp/SAT/）に提供するための連携用データを作成した。この連携用データを作成する過程で、大正蔵にその仏典が収録されているにもかかわらず、底本・校本として宮本を採録していない仏典（以下「大正蔵所収仏典のうち宮本を未採録のもの」と称す）が大量に存在することがわかった。

2022年度の本データベースの大幅改修に当たっては、これらの宮本にかかわるデータを活用して、「大正蔵所収仏典のうち宮本を未採録のもの」を、脚注の「底本/校本」欄に「未収」として取り込んだ（【図11】）。

先述のとおり、本データベースで検索すると、宮本のうち大正蔵に採録された仏典は、脚注の「底本/校本」欄の底本・校本の件数を合わせて830件である（【図10】）。一方、「大正蔵所収仏典のうち宮本を未採録の

もの」は、595件である（【図11】）。そのうち４件は、『勘同目録』に採録され、脚注に採録されないものであり、いずれも文字数の少ない仏典のため、単に底本との間に異同がなかった可能性がある（先述）。これらを除くと、「大正蔵所収仏典のうち宮本を未採録のもの」は、591件となる。

上記は、大正蔵から見た宮本の採録状況である。これに対し、宮本の画像URLをSATと連携させるために作成したデータ（Excel）を使って、宮本側から見た大正蔵の採録状況について、簡明な表にまとめると、下記のようになる。

宮本から見た大正蔵の採録状況	件数	本DB	差異
宮本の総数	1,454	1,425	29
①宮本が底本・校本に採録されているもの	827	830	-3
②勘同目録に記載されたものの、脚注に見えないもの	4	4	0
③大正蔵所収仏典のうち宮本を未採録のもの	604	591	13
④大正蔵にその仏典自体が採録されていないもの	19	0	19

宮本側から見ると、全1,454件中、「①宮本が底本・校本に採録されているもの」は827件である。「②勘同目録に記載されたものの、脚注に見えないもの」は、本データベースの検索結果と同じく４件である。「③大正蔵所収仏典のうち宮本を未採録のもの」604件は、大正蔵にその仏典が収録されているにもかかわらず、底本・校本として宮本を採録していない仏典である[21]。「④大正蔵にその仏典自体が採録されていないもの」は19件であり（本稿巻末【表１：宮本から見た大正蔵の採録状況】④<１>～<19>を参照）[22]、これらは対応する仏典が大正蔵に存在しないため、本データベースでは未登録となっている。

本データベースを使って調べると、「①宮本が底本・校本に採録されているもの」で３件、「③大正蔵所収仏典のうち宮本を未採録のもの」で13件の差があり、「④大正蔵にその仏典自体が採録されていないもの」を加えると、総数で29件の差がある。

「①宮本が底本・校本に採録されている仏典」について、本データベースの方が３件多い理由は、下記のとおりである。

先述のとおり、本データベースの検索結果830件のうち８件は、大正蔵が宋版一切経以外の宮内庁書陵部蔵本を用いていたものである（【表１】

①＜１＞～＜８＞)。また、大正蔵では２件と数えている仏典を、宮本では1件と数えているものが２件あり（【表１】①＜９＞<10>、<11><12>)、大正蔵４件が宮本では２件となる。ここで10件分の差が生じており、これを差し引くと820件となる。

T0397『大方等大集経』60巻は、宮本では『大方等大集経』30巻、『大乗大方等日蔵経』10巻（巻７欠)、『大方等大集月蔵経』10巻、『大集須弥蔵経』２巻、『無尽意菩薩経』４巻、『仏説明度五十校計経』２巻の計６件からなっている（【表１】①<13>～<18>)。そのほか、大正蔵では１件と数えている仏典を、宮本では２件と数えているものが２件あり（【表１】①<19><20>、<21><22>)、大正蔵２件が宮本では４件となる。ここで７件分の差が生じており、これを加算すると、本データベースの件数は827件となり、宮本と一致する。

以下、本データベースを活用して分析を試みる都合上、宮本から見た件数827件ではなく、本データベース上での件数830件から、大正蔵が宋版一切経以外の宮内庁書陵部蔵本を用いた８件を差し引いた「822件」を、「①宮本が底本・校本に採録されているもの」の総数として取り扱う。

「③大正蔵所収仏典のうち宮本を未採録のもの」について、本データベースの方が13件少ない理由は、下記のとおりである。

大正蔵では１件と数えている仏典を、宮本では12件と数えているものが１件あり（【表１】③＜１＞～<12>)、２件と数えているものが２件ある（【表１】③<13><14>、<15><16>。大正蔵２件が宮本では４件となる)。ここで13件分の差が生じており、これを加算すると、本データベースの件数は604件となり、宮本と一致する。以下、①と同様に、宮本から見た件数604件ではなく、本データベース上での件数「591件」を、「③大正蔵所収仏典のうち宮本を未採録のもの」の総数として取り扱う。

なぜ大正蔵では、宮本との校合に当たり、591件もの仏典を採録しなかったのか、そこになんらかの傾向は見られるのかについて、次節以降で検討してみたい。

3　本データベースを活用した大正蔵の宮本採録状況の分析

本データベースではファセット検索に「基本情報-配本」を設定してあり、これを使うと、大正蔵の初版の配本順でデータを集計することができる（【図12】）。そこで、配本順で「①宮本が底本・校本に採録されているもの」を絞り込むと、本稿巻末【表２：大正蔵から見た宮本の採録状況】の宮本「採録」欄のようになる。

大正蔵は、麗本を底本に、増上寺三大蔵経や明本・宮本を校本とし、さらに聖語蔵など古写本を対校本に加えた校訂大蔵経を目指して編纂が開始された。大正蔵の巻末「略符」とその変遷、および『勘同目録』・脚注から見た底本と校本の採録状況を分析すると、第28回配本の第33巻を転換点として、密教関係の経典、経律論の注疏類、中国撰述経典を収録するため、脚注に用いるテキストの略号に㊥・㊁・㊦等の表記を新たに加え、江戸時代の刊本など種々雑多なテキストを底本・校本として採録するようになったことがわかっている[23]。

そこで、まずこの編纂方針の転換が宮本の未採録に影響していないかを調べてみたい。第27回配本以前と、第28回配本以後に分けて宮本の採録状況を合算すると、下記のようになる。

大正蔵初版の配本	採録巻数	宮本採録件数	大正蔵仏典収録件数	採録率
第１～27回	20巻／25巻	740件／1,012件	1,124件	65.8％
第28～55回	11巻／25巻	82件／401件	1,151件	7.1％

これを見ると、第28回配本を境に、宮本を採録した巻数・件数が大幅に減少していることは明かである。第１～27回配本のうち、宮本を採録するのは、第４、７、９、11～27回配本の全20巻である。この期間の大正蔵の仏典収録件数は総計1,124件であり、そのうち約66％で宮本が採録されている。一方、第28～55回配本のうち、宮本を採録するのは、第33、37、38、40～42、44、45、47、48、53回配本の全11巻である。この期間の大正蔵の仏典収録件数は総計1,151件であり、宮本の採録率は約

７％しかない[24]。

上記の集計は、個々の仏典の巻数・文字数は考慮に入れず、大正蔵の巻数・収録仏典の件数で大括りに集計したものである。なかには、『大般若波羅蜜多経』600巻（大正蔵第５～７巻に収録）のように大部の仏典もあれば、数百字に満たない仏典もあり、件数だけで単純に比較はできない。しかしながら、第28回配本以降、宮本を採録する巻が激減するのは事実であり、これは第28回配本を機に大正蔵の編纂に質的な転換が発生していたことと符合している。

大正蔵所収仏典には宮本を採録したものと採録しなかったものがあるが、その件数（【表２】の宮本「計」欄）を大正蔵の収録仏典の総数（【表２】の大正蔵「仏典数」欄）で割って、大正蔵の収録仏典数に対する宮本所収仏典の収録率（未採録のものを含む）を算出したもの（【表２】の対大正蔵「収録率」欄）が下記の表である。

大正蔵初版の配本	宮本件数	大正蔵仏典収録件数	収録率
第１～27回	1,012	1,124	90.0%
第28～55回	401	1,151	34.8%
計	1,413	2,275	62.1%

これは大正蔵に採録されなかった宮本も含めた数字であるが、第１～27回配本に比べ、第28～55回配本は収録率が55％も低下している。

そもそも第27回配本以前は、阿含部、本縁部、般若部、法華部、華厳部、宝積部、涅槃部、大集部、経集部、律部、釈経論部、毘曇部、瑜伽部（下）、論集部からなる。これらは大蔵経の経・律・論に当たる部分であり、その大部分は唐釈智昇『開元釈教録』において大蔵経に入蔵されることが確定したものであった。

これに対し、第28回配本以後は、中観部、瑜伽部（上）、経疏部、律疏部、論疏部、諸宗部、史伝部、密教部、事彙部、外教部、目録部からなる。これらの中には『開元釈教録』で入蔵されていた仏典も含まれるが、東禅寺版や開元寺版に入蔵されていなかった仏典や、南宋後期以後に著述された仏典が少なくない。【表２】対大正蔵「収録率」が乱高下しているのはそのためである。なお、宮本の「採録」「未採録」の「計」が０件

のものは、大正蔵収録仏典のうち採録されるべき宮本が1件もない巻であり、計７巻ある（第30～32、36、39、43、51回配本）。

要するに、第28～55回の宮本の採録率・収録率の低下には、この時期の大正蔵収録仏典のうち宮本が収録されるべきものがもともと少なかったことが影響しているのである。

これは、宮本自体に内在する問題であり、宮本の未採録の問題とは直接関係しない。宮本の未採録の真の要因は、大正蔵の編纂体制に関わるものである。

4　大正蔵編纂当時の宮本の校合体制とその影響

本データベースのファセット検索を使って、大正蔵の配本順で「③大正蔵所収仏典のうち宮本を未採録のもの」591件（宮本側から見ると604件）を絞り込むと、【表２：大正蔵から見た宮本の採録状況】の宮本「未採録」欄のようになる(25)。

試みに前節と同様、第27回配本以前と第28回配本以後に分けて合算すると、宮本を底本・校本に採録していない仏典は、第27回配本以前で272件、第28回配本以降で319件となり、第28回の編纂方針の転換点の前後で拮抗している。その一方、大正蔵の刊行初期の第５回配本までと、刊行終盤の第50回配本以後に、未採録のものが集中している（【表２】の網掛け部分）。

大正蔵の部門（分類）に着目すると、宮本を採録していない仏典は、第１・２巻の阿含部上下、第３・４巻の本縁部上下、第19～21巻の密教部２～４(26)、第55巻の目録部に集中しており、部門に著しい偏りが見られる。なおかつ、これらの巻では、１件も宮本を底本・校本として採録していない。

なぜこのような状況になっているのか、大正蔵の編纂当時における宮本の校合体制から考えてみたい。

大正蔵の校合作業は、校合資料に応じて、第一から第五の５箇所の校合所で行われ、そのうち宮本の校合作業は第三校合所の置かれた宮内省図書寮で行われた(27)。

実際には、『大正新修大蔵経　内容見本』（大正一切経刊行会、［1931年２月］）の「宮内省図書寮の古刻経」の項に「宮内省図書寮には現存最古の旧宋版一切経がある。旧宋蔵の東禅寺本及開元寺本は倶に之を対校し、時に忍澂師校正録をも対照したのである。時恰も大震災の直後、東京虎の門図書寮の仮館内の校合室で其の全部の対校の業を了した。」（p.5）とあり、「宮内省より与へられたる特恵」の項に「宮内省は、特に一切経刊行奨励の意を以て、（中略）宮内省図書寮所蔵旧宋蔵五千余巻は、寮庫罹災の為今は赤坂離宮に収められてある。之を虎の門宮内省図書寮仮館の一室に分送せられ、爰に第三校合所を設け、常任編輯員三名之に当つたのであつた。」（p.9）とあるように、1923年９月１日に発生した関東大震災によって図書寮の寮庫が罹災したため、宮本は赤坂離宮に収蔵され、これを虎の門宮内省図書寮仮館に分送して、宮本の校合が行われていた[28]。

大正蔵各巻の奥付頁には、校合所ごとの人員の一覧が記載されている[29]。奥付頁で第三校合所の人員の変遷を見ていくと、【表３】[30]で示したように、第１回配本時（1924年４月８日）、第三校合所は１名でスタートし、第２～４回配本は２名、第５回配本より３名体制となった。以後、５名まで増員された時期もあったが、第27回配本より３名体制に戻り、第49回配本（1928年５月15日）以降、奥付頁に校合所として名前は残しつつも、人員は一人も記載されなくなる。

奥付頁には第１回配本時より第三校合所に関する記載があるが、最初に『勘同目録』および脚注に宮本の名が見えるのは、1924年８月15日に刊行された第４回配本の第８巻般若部４であり、28件の仏典で校本として採録されている。第８巻には他に５件宮本に収録される仏典があるが、宮本との校合は行われていない[31]。その前後の第１～３回配本、および第５回配本では、宮本に収録される仏典が計215件あるが、１件も校合に使われていない。

第三校合所での校合作業が開始されたのは、『大正新修大蔵経総目録　附会員名簿』（前掲）別冊「刊行経過要略」（小野玄妙）によれば、1924年正月初めのことで、「今回に限り特に数函づゝ態々図書寮まで御取出を賜つた」とある（p.3）。同書によれば、増上寺の三大蔵経と明本の校合が始まったのが1923年４月、正倉院聖語蔵の校合が始まったのが同年５

月末であり、宮本の校合はこれらに遅れること7～８ヶ月であり、刊行初期の配本分に校合作業が間に合わなかったとしても不思議ではない。

大正蔵の刊行初期において、第４回配本の第８巻般若部４のみ、宮本との校合が行われた理由については、推測の域を出ないが、従来の大蔵経において般若部が冒頭にあったため、宮本の分送が冒頭の般若部から始められたことを示している可能性がある。ただし第８巻の収録仏典は、宮本の冒頭に固まってはおらず、千字文で言えば、菜（061）、薑（064）、河（067）、淡（068）、鱗（069）、潛（070）、羽（071）、翔（072）、將（491）、八（499）、兵（504）、高（505）、迴（554）、漢（555）、丁（560）、勿（564）の各函に分散している。図書寮仮館への分送は数函ずつ行われることになっていたのであるから、校合に必要な仏典をリストアップして、函数に制限のある中、必要な仏典を取り寄せて、締切に合わせて校合するのは至難の業であったに違いない。特に、校合作業が軌道に乗るまでの刊行初期においては多大な困難があったものと推測される。

一方、第50回配本以降の密教部２～４、目録部では、校本に採録すべき宮本は294件に上る。この時期では、第53回配本のT2123『諸経要集』において宮本を校本に採録したのみであり、同じ第53回配本でもT2128『一切経音義』、T2137『金七十論』、T2138『勝宗十句義論』の３件については、宮本を採録していない。

それでは、第49回配本以降、いまだ校合すべきテキストがあるのにもかかわらず、なぜ第三校合所を閉鎖したのであろうか。最後に、その理由について考えてみたい。

震災で罹災した図書寮は虎の門の仮館に移転していたが、1926年12月より、新庁舎の建設を開始した。工期は1927年10月までであり[32]、1928年９月には落成記念展覧会が開催されている[33]。

第三校合所に人員が配置されなくなった時期は、新庁舎の竣工と落成記念展覧会の間に当たる。よって、新庁舎の竣工後、蔵書等の移転を行うため、第49回配本が刊行された1928年５月頃に、第三校合所が閉鎖されたと考えるのが妥当であろう。

おわりに―宮本の採録をめぐって

下の表は、大正蔵を第27回配本以前と、第28回配本以後の２期に分けて、大正蔵の収録仏典の分布と、宮本の件数、大正蔵における宮本の採録件数・未採録の件数を一覧化したものである。

収録仏典の分布	大正蔵の分布		宮本の分布					
配本順	件数	比率	件数	比率	採録	比率	未採録	比率
第１～27回配本	1,124	49%	1,012	72%	740	90%	272	46%
第28～55回配本	1,151	51%	401	28%	82	10%	319	54%
小計	2,275		1,413		822		591	

宮本中の大正蔵所収仏典は1,413件(34)であり、そのうち大正蔵は822件を底本・校本として採録した。しかし大正蔵が宮本を底本・校本として採録しなかった仏典は591件にのぼる。これらは、本来、宮本を用いて校合してしかるべきテキストであった。

大正蔵に採録された宮本は、大正蔵編纂の転換点となった第27回配本以前のものが740件と、９割を占める。それに対し、大正蔵に採録されなかった宮本は、第27回配本以前が272件と第28回配本以降が319件と拮抗する一方、第５回配本以前の刊行初期と、第50回配本以後の刊行終盤に偏っている。内容的に見ると、第１・２巻阿含部、第３・４巻本縁部、第19～21巻密教部２～４（密教部１は22件中18部を採録）、第55巻目録部において、宮本が全く採録されていない。

その原因として、刊行初期においては、宮内省との連携、校合体制の整備が間に合わず、締切までに校合作業ができなかった可能性が想定される。刊行終盤においては、関東大震災で罹災した図書寮の新庁舎竣工と、それに伴う宮本の赤坂離宮から新庁舎への移送と無関係ではあるまい。

宮本は、本来であれば、第27回配本以前で1,012件、第28回配本以後で401件、計1,413件が採録されていたはずであった。しかし、前者の採録率は7割強であり（740件／1,012件）、後者に至ってはわずか２割である

(82件／401件)。結果的に、これらの校合を行わずに、大正蔵は編纂されたのである。

大正蔵に間違いが多いことは広く知られていることであるが、宮本の採録仏典にこのような偏りがあることはこれまで知られていなかったことである。本データベースを漢文大蔵経の文献学的研究基盤として拡充する中で、大正蔵の編纂当時に行われなかった宮本591件との校合作業をいかに実現するかは、検討しなければならない重要な課題である。その意味で、2022年度のリニューアルによって「宮内庁書陵部収蔵漢籍集覧」の宮本のIIIF画像との連携を果たしたのは、大きな一歩となったのではないかと考えている。

今回は、本データベースを活用して、大正蔵と宮本の関係について考察したが、西蓮社本や聖語蔵をはじめとする他のテキストとの関係においても、編纂の実態として類似した状況が存在したことが予想される。大正蔵を漢文大蔵経のスタンダードテキストとして活用していく以上、個々のテキストの校合の実態を把握して利用する必要があることは言を俟たない。今後も、本データベースの拡充を通して、オンライン上で書誌・画像・デジタルテキストを活用した仏典・大蔵経の研究が実現できるような環境の構築を目指していく。これによって、大正蔵の編纂の実態の解明が可能となるだけでなく、大蔵経諸版の比較研究にも活用できるようになると考えている。

本稿は、公益財団法人東洋文庫2021年度研究データベース会議（2022年２月24日）にて発表した「『大正新脩大蔵経』底本・校本データベースの活用事例―大正蔵の「宮本」収録をめぐって―」をもとに、当日の質疑応答を踏まえ、かつ2022年11月のリニューアル後の本データベースを活用して加筆訂正したものである。報告の機会を与えて下さった東洋文庫の関係者、および会議の席上、または会議後にご質問ご意見を賜った方々に対して、深甚の謝意を表したい。

本データベースは、JSPS科研費21H04345の助成による成果の一部である。

注

（1） 拙稿「『大正新脩大蔵経』の初版・再刊・普及版の刊行をめぐって」（『東洋文庫書報』第51号、東洋文庫、2020年３月。http://id.nii.ac.jp/1629/00007370/）を参照。

（2） 拙稿「『大正新脩大蔵経』の底本と校本―巻末「略符」・『大正新脩大蔵経勘同目録』・脚注の分析を通して」（東洋文庫リポジトリERNEST2019年度科学研究費補助金研究成果、2020年３月。http://doi.org/10.24739/00007257）を参照。

（3） 以下、本データベースの「凡例」（https://static.toyobunko-lab.jp/taishozo/page/legend）を合わせて参照されたい。

（4） 本稿注（２）前掲拙稿の「１　巻末「略符」とその変遷」「d.「略符」の変遷第Ⅲ期―校合内規の改定」および「おわりに」を参照。

（5） IIIFは、International Image Interoperability Frameworkの略で、画像共有のための国際規格。画像データをPyramid Tiled Tiff 形式（精度の異なる複数の画像を階層化したデータ）に加工した上でメタデータを付すことで、デジタル画像に関する情報が標準化され、その相互運用性が格段に向上し、高精細画像のスムーズな拡大・縮小、アノテーション（画像に対するコメントやタグ等）の付与・共有等、データベースの利用者に様々な利点を提供することが可能となる。国際規格であるため、国内外の様々な機関が公開している画像を１つのアプリケーション上で表示・比較できる。なお、このように特定の形式で作成されたファイルを表示・閲覧するためのアプリケーションを「ビューア（viewer）」と呼ぶ。

（6） 西蓮社は、増上寺山内の修学僧が利用する大蔵経を収蔵するため、寛延２年（1749）に練誉雅山上人が創建した寺院のこと。詳細は、拙著『旧三縁山増上寺山内寺院・報恩蔵西蓮社志稿』（西蓮社、2012年９月。http://doi.org/10.24739/00006483）を参照。

（7） 2010～2015年に西蓮社が所蔵する嘉興版大蔵経2,350冊に対して悉皆調査を実施し、その際に作成した書誌情報と約２万コマのスキャン画像をデータベース化したもの。

（8） 本稿注（２）前掲拙稿の「２　『大正新脩大蔵経』の底本・校本の採用状況」および「おわりに」を参照。

（９） 東京では、大正大学209件（その前身である宗教大学141件、豊山大学65件、大正大学3件）、駒澤大学７件、京都では大谷大学113件、龍谷大学15件を調査対象とする。なお、諸寺院所蔵本についても、閲覧許可を得られれば随時書誌調査を実施する予定である。

(10) 2022～2024年度にかけて、毎年度約33,000コマの撮影を実施する予定。

(11) SAT大蔵経データベース研究会が撮影したのは、『放光般若波羅蜜経』30巻、東晋仏陀跋陀羅等訳『大方広仏華厳経』60巻、唐実叉難陀訳『大方広仏華厳経』80巻（巻八十末に唐般若訳『大方広仏華厳経』巻四十を重複して混入する）、『大般涅槃経』40巻、『大般涅槃経後分』２巻、『仏説長阿含経』22巻、『瑜伽師地論』100巻、『一切経音義』26巻。

(12) TEIは、Text Encoding Initiativeの略で、人文系のテキストデータを効率的・効果的に共有し、システム変更等の影響を最小限に抑えて継承・発展させていくことを目的に作られた国際的なガイドラインである。文章の見た目や構造をわかりやすく記述し、データのやりとりや管理を簡易に行うためにXML形式で記述する。テキストデータに周辺情報（作成者、作成日等）、本文情報（著者情報、文章の構成）、外部リンク（固有名詞、辞書、画像、URL等）を記録できる。

(13) このシステムの構築については、基盤研究（C）「『大正新脩大蔵経』編纂の実態に関する書誌学的研究：増上寺報恩蔵本を通して」の研究活動の中で検討を開始したものである。2020年度にSAT大蔵経テキストデータベース研究会提供の『釈禅波羅蜜次第法門』のTEIテキストを元に、酉蓮社本のTEIテキストを作成するべく、校勘情報のタグ付け作業を開始し、中村覚氏の協力でIIIF画像とリンクしたTEIビューワーの開発に着手した。なお、大正蔵は直接底本・校本によらず、縮刷蔵経（『日本校訂大蔵経』）や頻伽蔵経（上海『頻伽精舎校刊大蔵経』）を使った経典があると従来より指摘されている。そこで、将来的には、大正蔵諸版の画像を比較して異同箇所を機械的に自動判別し、IIIF・TEIを活用して縮刷蔵経・頻伽蔵経と比較できるシステムを試作するべく検討を進めている。このシステムを活用して酉蓮社本との異同を調べることで、大正蔵が酉蓮社本に直接依拠したのか、それとも縮刷蔵経や頻伽蔵経を使ったのか判別できるようにしたいと考えている。

(14)　ファセット検索は、ユーザが使うと考えられる検索条件を、サイト側があらかじめ設定しておき、ユーザはその条件を選択するだけでコンテンツを絞り込むことができる機能のこと。

(15)　T1821『倶舎論記』30巻、T1822『倶舎論疏』30巻は、巻ごとに底本・校本が変わるため、巻単位で底本・校本の情報を登録してある。それぞれ巻一に末・余があるため、実際の巻数は31巻である。上記の件数から60件を引くと底本の件数は、2,275件となる。

(16)　嘉興版大蔵経については、本稿注（６）前掲拙稿「はじめに」pp.1-4を参照。

(17)　『大正新修大蔵経総目録　附会員名簿』（大正一切経刊行会、1930年５月）別冊「刊行経過要略」（小野玄妙）p.2を参照。

(18)　ほかに2012～2013年東京大学東洋文化研究所東洋学研究情報センター共同研究「日本漢籍集散の文化史的研究―「図書寮文庫」を対象とする通時的蔵書研究の試み―」、2014～2015年同共同研究「日本所在漢籍に見える東アジア典籍流伝の歴史的研究―宮内庁書陵部蔵漢籍の伝来調査を中心として―」の成果の一部である。

(19)　宮本の書誌解題については、宮内庁書陵部蔵漢籍研究会編『図書寮漢籍叢考』（汲古書院、2018年3月）の図録編「Ⅲ宋版」に「38.［大蔵経］（或一切経）1454種5733巻附字函釈音532巻」として掲載されている。

(20)　「仏経目録規範資料庫」（https://authority.dila.edu.tw/catalog/）によれば、『仏説分別縁生経』887字、『仏説浄意優婆塞所問経』2,177字、『仏説大方広未曽有経善巧方便経』1,778字、『都部陀羅尼目』1,894字であり、いずれも文字数の少ない仏典であるため、異同がなかったとしても不思議ではない。

(21)　T1998A『大慧普覚禅師語録』は、宮内省書陵部蔵の宋版一切経ではなく、五山版を採録している。また、宮本のうち『大方広仏華厳経入不思議解脱境界普賢行願品』１巻は、T0293『大方広仏華厳経』40巻（唐般若訳）の巻40に当たる。宋本・元本もこの1巻のみであるが、大正蔵では第10巻p.844巻40脚注〈２〉に「四十華厳中宋元二本唯有此一巻」と注記を付して校本に用いているので、宮本も校本に使ってよかったはずである。T0251『般若波羅蜜多心経』１巻（玄奘訳）、T1564『中論』４巻、

T1568『十二門論』１巻、T1569『百論』２巻は、宮本では全張鈔配である（宮本の『中論』は５巻）。T2061『宋高僧伝』30巻は、宮本では宋思渓版（巻24欠）が補配されている。これらは、宮本自体が福州版大蔵経ではないテキストを採録していたため、大正蔵に収録されなかったと考えられる。本注に挙げた仏典は、本データベースに脚注「未収」として登録した。

T2115『鐔津文集』19巻は、宮本では『鐔津文集』巻１至３に相当する『輔教編』３巻のみ収録される。大正蔵では『輔教編』を単行の形で採録していないが、『鐔津文集』に収録されるため脚注「未収」として採録した。

(22) 宮本の『大方広仏華厳合論』120巻は、宋の釈賛寧がT1739『新華厳経論』40巻と経文を合わせて編纂したものであるが、『新華厳経論』とは別書と言えるほどの異同がある。それが原因となって、校本として採録されなかった可能性がある。

(23) 本稿注（２）前掲拙稿「１　巻末「略符」とその変遷」および「附録」【表１　巻末「略符」変遷表】を参照。

(24) 本データベース上での第28～55回配本の底本の合計は、1,211件である。しかし第43回配本のT1821『倶舎論記』30巻、T1822『倶舎論疏』30巻は、それぞれ全31巻の底本を別々に登録してある。そのため、それぞれの底本30件、計60件を差し引いて、1,151件とした（本稿注（15）参照）。

(25) 第６、８、10回配本は、『大般若波羅蜜多経』を収録する第５～７巻に当たるため、３巻で１件として数えた。また、「②勘同目録に記載されたものの、脚注に見えないもの」４件は、ここに計上していないが、第16回配本１件、第17回配本２件、第18回配本１件である。

(26) 第48回配本の第18巻密教部１（収録仏典は計76件）では、宮本から18件を校本として採録しているが、T0865『金剛頂一切如来真実摂大乗真実現証大教王経』、T0873『金剛頂蓮華部心念誦儀軌』、T0893B『蘇悉地羯囉経』、T0915『受菩提心戒儀』の４点を採録していない。なお、T0903『都部陀羅尼目』は、本稿注（20）で述べたように、『勘同目録』には校本として挙げられているが、文字数が少なく（1,894字）、校合を行ったものの異同がなかったのか、脚注には宮本との校合の痕跡が出てこない。

【表２】では、『都部陀羅尼目』を含む「②勘同目録に記載されたものの、脚注に見えないもの」４件（【表１】②<１>～<４>）を除いてある。

(27) 本稿注（１）前掲拙稿【表１　初版の配本順と校合者数】を参照。

(28) 「旧宋蔵五千余巻」は、帖数・巻数のいずれから見ても、現在の収蔵数（5733巻附字函釈音532巻、6264帖）と隔たりがあり、校合したのは宮本の全蔵ではなかった可能性がある。なお、震災で罹災した図書寮の庁舎は、1922年９月24日に移転したばかりの新庁舎（麹町区三年町一番地）であった（「宮内省図書寮ヨリ新築庁舎へ移転通知」JACAR（アジア歴史資料センター）Ref.A06050644200、枢密院文書・宮内省往復・稟議・雑書・大正十一年（国立公文書館））。移転後、わずか１年で震災に見舞われたことになる。

(29) 奥付頁を見ると、宮本が使われていない巻であっても、奥付に第三校合所の人員が記録されている。よって、これは、あくまでその巻を刊行した時点での校合人員を記録したにすぎず、必ずしもその巻の校合に関わった人員を記録したものではなかったものと考えられる。

(30) 本表は、本稿注（１）前掲拙稿【表１　初版の配本順と校合者数】をもとに、第10回配本以前と第47回配本以降を抜粋したものである。

(31) T0230『聖八千頌般若波羅蜜多一百八名真実円義陀羅尼経』、T0245『仏説仁王般若波羅蜜経』、T0247『仏説了義般若波羅蜜多経』、T0250『摩訶般若波羅蜜大明呪経』、T0251『般若波羅蜜多心経』（宮本は鈔配）の５件。そのうち『仏説仁王般若波羅蜜経』、『摩訶般若波羅蜜大明呪経』、『般若波羅蜜多心経』の３件は翔字函（072）（３桁の数字は千字文の次序、以下同）、『仏説了義般若波羅蜜多経』は丁字函（560）、『聖八千頌般若波羅蜜多一百八名真実円義陀羅尼経』は勿字函（564）に採録されている。『昭和法宝総目録』第１巻所収の『宮内省図書寮一切経目録』の著録状況を見ると、『仏説仁王般若波羅蜜経』は著録されているが、『摩訶般若波羅蜜大明呪経』は著録されておらず、『般若波羅蜜多心経』は著録されているものの「(写本)」と注記されている（p.759）。

(32) 『東京横浜復興建築図集1923－1930』（丸善株式会社、1931年２月）「31 宮内省図書寮庁舎」を参照。

(33) 『昭和三年九月新築記念展覧会　陳列図書目録』（宮内省図書寮）、『昭和

参年九月新築落成記念〔絵葉書〕』（同前）を参照。

(34) 本データベースを使って検索すると、宮本の総数は1,425件である。ここから、大正蔵が宋版一切経所収本ではなく、その他の宮内庁書陵部蔵の仏典を採録した８件（【表１】①＜１＞～＜８＞）と、「②勘同目録に記載されたものの、脚注に見えないもの」４件（【表１】②＜１＞～＜４＞）を差し引くと、1,413件となる。

（公益財団法人東洋文庫研究部主幹研究員）

基本情報							勘同目録				脚注				詳細情報
経典番号	枝番	経典名 ▶	収録巻次	部門	配本	出版年月日	底本/校本	❹	❼	❼備考	底本/校本	新添部分	テキスト	備考	
T0001	1	長阿含經 ⊞	1	阿含部上	1	19240408	底本	麗本			底本		〔麗本〕		詳細
T0001	1	長阿含經 ⊞	1	阿含部上	1	19240408	校本	宋本			校本		〔宋〕		詳細
T0001	1	長阿含經 ⊞	1	阿含部上	1	19240408	校本	元本			校本		〔元〕		詳細
T0001	1	長阿含經 ⊞	1	阿含部上	1	19240408	校本	明本			校本		〔明〕		詳細
T0001	1	長阿含經 ⊞	1	阿含部上	1	19240408	校本	聖本	聖語藏經五九號・卷第一第二第三第四第五第六第七第八第九第十第十五計十一卷、天平十二年五月寫光明皇后御願		校本		〔聖〕		詳細
T0001	1	長阿含經 ⊞	1	阿含部上	1	19240408	校本	巴本			校本		〔巴本〕		詳細
T0001	1	長阿含經 ⊞	1	阿含部上	1	19240408					未収		宮本		詳細

【図１】DB検索結果一覧画面

詳細情報

基本情報

経典番号	枝番	経典名	収録巻次	部門	配本	出版年月日
T0001	1	長阿含經 ⊞	1	阿含部上	1	19240408
経典別名				巻数	訳著者	
				22	後秦佛陀耶舍・竺佛念譯	

勘同目録

底本/校本	❹	❼	❼備考
底本	麗本		

勘同目録詳細情報

テキスト1（勘同目録）	勘同目録所在	153a~153c ⊞
	標準名称	麗本
	巻	
	国	朝鮮
	時代	高麗
	年	1151
	刊写者	
	刊写形態	刊
	関与者	

脚注

底本/校本	新添部分	テキスト	備考
底本		〔麗本〕	

脚注詳細情報

テキスト1（脚注）	底本推定	勘同目録により推定
	略号使用	
	略号解説	〈麗〉麗本（The 'Kao-Li Edition' A. D. 1151）
	標準名称	麗本
	巻	
	国	朝鮮
	時代	高麗
	年	1151
	刊写者	
	刊写形態	刊
	関与者	

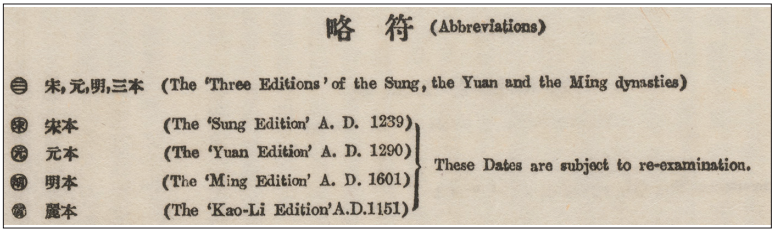
【図２】DB「詳細情報」画面

【図3】ファセット検索

【図4】ファセット検索「底本/校本」

【図5】ファセット検索「勘同目録-テキスト」

【図6】ファセット検索「脚注-テキスト」



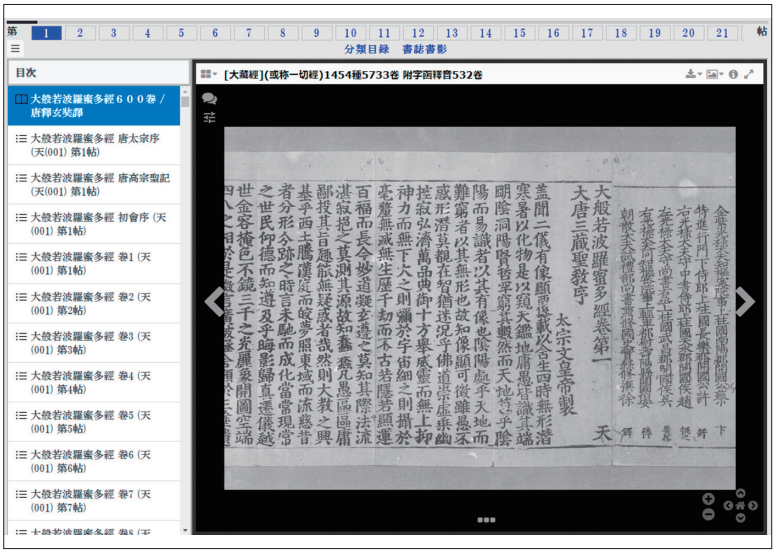
略　符 (Abbreviations)

(三) 宋,元,明,三本 (The 'Three Editions' of the Sung, the Yuan and the Ming dynasties)

(宋) 宋本 (The 'Sung Edition' A. D. 1239)
(元) 元本 (The 'Yuan Edition' A. D. 1290)
(明) 明本 (The 'Ming Edition' A. D. 1601)
(麗) 麗本 (The 'Kao-Li Edition' A.D.1151)

These Dates are subject to re-examination.

【図７】大正蔵第３巻巻末「略符」の「三本」

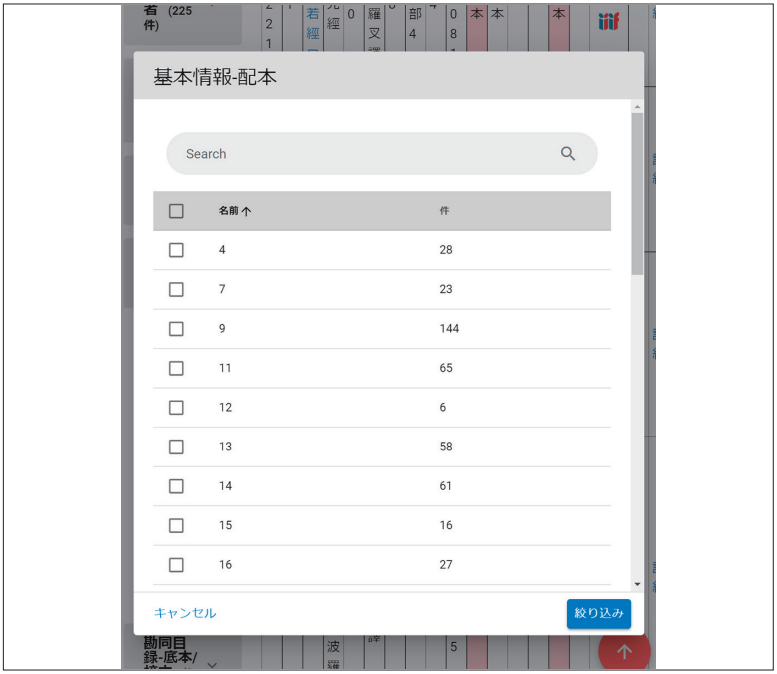


【図８】「宮内庁書陵部収蔵漢籍集覧」宮本の一例

【図 9】ファセット検索「勘同目録-テキスト」＞「宮本」

【図10】ファセット検索「脚注-テキスト」＞「宮本」

【図11】ファセット検索「脚注-テキスト」＞「宮本」＞「未収」



【図12】ファセット検索「基本情報-配本」＞「すべて表示」（名前：昇順ソート）

【表１：宮本から見た大正蔵の採録状況】

採録状況の種別	No.	『大正新脩大蔵経』底本・校本DB	宮本データ（Excel）	差違	差違が生じた理由
		経典番号・仏典名称	仏典名称		
①宮本が底本・校本に採録されているもの	＜１＞	T1703金剛般若波羅蜜経註解１巻	－	-1	大正蔵本は宋版一切経ではない
	＜２＞	T1798金剛頂大瑜伽秘密心地法門義訣１巻	－	-1	同上
	＜３＞	T1799首楞厳義疏注経10巻	－	-1	同上
	＜４＞	T1804四分律刪繁補闕行事鈔３巻	－	-1	同上
	＜５＞	T1805四分律行事鈔資持記３巻	－	-1	同上
	＜６＞	T1958安楽集２巻	－	-1	同上
	＜７＞	T1985鎮州臨済慧照禅師語録１巻	－	-1	同上
	＜８＞	T2008六祖大師法宝壇経１巻	－	-1	同上
	＜９＞	T0678相続解脱地波羅蜜了義経１巻	相続解脱地波羅蜜了義経１巻相続解脱如來所作随順処了義経１巻	-1	宮本では１件として数える
	<10>	T0679相続解脱如來所作随順処了義経１巻			
	<11>	T2078伝法正宗記９巻	伝法正宗記９巻（巻１至９）論２巻（巻11,12）	-1	同上
	<12>	T2080伝法正宗論２巻			
	<13>	T0397大方等大集経60巻	大方等大集経30巻	5	T0397巻１至26、31至33
	<14>		大乗大方等日蔵経10巻（巻７欠）		T0397巻34至39、41至43
	<15>		大方等大集月蔵経10巻		T0397巻46至55
	<16>		大集須弥蔵経２巻		T0397巻57至58
	<17>		無尽意菩薩経４巻		T0397巻27至30
	<18>		仏説明度五十校計経２巻		T0397巻59至60
	<19>	T1435十誦律	十誦律58巻	1	T1435巻１至59
	<20>		十誦律毗尼序３巻		T1435巻60・61
	<21>	T1452根本説一切有部尼陀那目得迦10巻	根本説一切有部尼陁那５巻	1	T1452巻１至５
	<22>		根本説一切有部目得迦５巻		T1452巻６至10

採録状況の種別	No.	『大正新脩大蔵経』底本・校本DB	宮本データ（Excel）	差違	差違が生じた理由
		経典番号・仏典名称	仏典名称		
②勘同目録に記載されたものの、脚注に見えないもの	＜1＞	T0718仏説分別縁生経	仏説分別縁生経１巻	—	脚注未収
	＜2＞	T0755仏説浄意優婆塞所問経	仏説浄意優婆塞所問経１巻	—	同上
	＜3＞	T0844仏説大方広未曽有経善巧方便経	仏説大方広未曽有経善巧方便品１巻	—	同上
	＜4＞	T0903都部陀羅尼目	陀羅尼門諸部要目１巻	—	同上
③大正蔵所収仏典のうち宮本を未採録のもの	＜1＞	T1331仏説灌頂七万二千神王護比丘呪経（仏説灌頂経）12巻	仏説灌頂三歸五戒帯佩護身呪経１巻	11	「宮内庁書陵部収蔵漢籍集覧」では別書誌扱い
	＜2＞		仏説灌頂七万二千神王護比丘呪経１巻		
	＜3＞		仏説灌頂十二万神王護比丘尼呪経１巻		
	＜4＞		仏説灌頂百結神王護身呪経１巻		
	＜5＞		仏説灌頂呪宮宅神王守鎮左右経１巻		
	＜6＞		仏説灌頂塚墓因縁四方神王呪経１巻		
	＜7＞		仏説灌頂伏魔封印大神呪経１巻		
	＜8＞		仏説灌頂摩尼羅亶大神呪経１巻		
	＜9＞		仏説灌頂召五方龍王攝疫毒神呪経１巻		
	<10>		仏説灌頂梵天神策経１巻		
	<11>		仏説灌頂隨願往生十方浄土普広所問経１巻		
	<12>		仏説灌頂章句拔除過罪生死得度経１巻		
	<13>	T1440薩婆多毘尼毘婆沙９巻	薩婆多毘尼毘婆沙８巻	1	同上
	<14>		続薩婆多毘尼毘婆沙１巻		
	<15>	T2153大周刊定衆経目録15巻	大周刊定衆経目録14巻	1	同上
	<16>		大周刊定偽経目録１巻		

採録状況の種別	No.	『大正新脩大蔵経』底本・校本DB	宮本データ（Excel）	差違	差違が生じた理由
		経典番号・仏典名称	仏典名称		
④大正蔵にその仏典自体が採録されていないもの	<1>	−	能断金剛般若波羅蜜多経１巻	—	
	<2>	−	唐貞元新定目録１巻	—	
	＜３＞	−	新訳大方広仏華厳経音義２巻	—	
	＜４＞	−	天聖広灯録30巻	—	
	＜５＞	−	建中靖国続灯録30巻	—	
	＜６＞	−	十六大阿羅漢因果識見頌１巻	—	
	＜７＞	−	御製縁識５巻	—	
	＜８＞	−	御製秘蔵詮20巻	—	
	＜９＞	−	御製仏賦２巻	—	
	<10>	−	御製詮源歌１巻	—	
	<11>	−	楞伽経纂４巻	—	
	<12>	−	千手千眼観自在菩薩根本真言釋１巻	—	
	<13>	−	大慧普覚禅師普説続附１巻	—	
	<14>	−	首楞厳経義海30巻	—	
	<15>	−	天台法華玄義科文５巻	—	
	<16>	−	妙法蓮華経文句科６巻	—	
	<17>	−	摩訶止観科文５巻	—	
	<18>	−	大方広仏華厳経合論120巻	—	
	<19>	−	釈大方広仏新華厳経論論主李長者事跡１巻	—	
宮本の総数		1,425	1,454	29	

【表２：大正蔵から見た宮本の採録状況】

大正蔵					宮本				対大正蔵	
配本順	収録巻次	部門	刊行年月日	仏典数	採録	未採録	計	採録率	採録率	収録率
1	1	阿含部上	1924/4/8	98	0	97	97	0%	0%	99%
2	3	本縁部上	1924/6/20	44	0	38	38	0%	0%	86%
3	4	本縁部下	1924/7/15	28	0	27	27	0%	0%	96%
4	8	般若部４	1924/8/15	42	28	5	33	85%	67%	79%
5	2	阿含部下	1924/9/15	57	0	53	53	0%	0%	93%
6	5	般若部１	1924/10/15	1	0	1	1	0%	0%	100%
7	13	大集部	1924/11/20	28	23	1	24	96%	82%	86%
8	7	般若部３	1924/12/20	−	0	−	0	−	−	−
9	14	経集部１	1925/1/20	166	144	6	150	96%	87%	90%
10	6	般若部２	1925/2/20	−	0	−	0	−	−	−
11	15	経集部２	1925/3/20	71	65	1	66	98%	92%	93%
12	11	宝積部上	1925/4/15	12	6	1	7	86%	50%	58%
13	16	経集部３	1925/5/15	65	58	0	58	100%	89%	89%
14	12	宝積部下／涅槃部全	1925/6/15	76	61	9	70	87%	80%	92%
15	9	法華部全／華厳部上	1925/7/15	17	16	1	17	94%	94%	100%
16	10	華厳部下	1925/8/15	31	27	3	30	90%	87%	97%
17	17	経集部４	1925/9/15	132	111	4	115	97%	84%	87%
18	23	律部2	1925/10/15	13	7	2	9	78%	54%	69%
19	32	論集部全	1925/11/15	66	48	7	55	87%	73%	83%
20	31	瑜伽部下	1925/12/15	43	40	1	41	98%	93%	95%
21	25	釈経論部上	1926/1/15	15	9	4	13	69%	60%	87%
22	29	毘曇部４	1926/2/15	6	4	0	4	100%	67%	67%
23	26	釈経論部下／毘曇部１	1926/3/15	26	17	7	24	71%	65%	92%
24	22	律部１	1926/4/15	15	13	1	14	93%	87%	93%
25	28	毘曇部３	1926/5/15	12	11	0	11	100%	92%	92%
26	24	律部３	1926/6/15	59	51	3	54	94%	86%	92%
27	27	毘曇部２	1926/7/15	1	1	0	1	100%	100%	100%
28	33	経疏部１	1926/8/15	25	0	2	2	0%	0%	8%
29	34	経疏部２	1926/9/15	13	0	2	2	0%	0%	15%
30	37	経疏部５	1926/10/15	21	0	0	0	−	−	−
31	35	経疏部３	1926/11/15	5	0	0	0	−	−	−
32	38	経疏部６	1926/12/15	18	0	0	0	−	−	−
33	50	史伝部２	1927/1/15	27	14	1	15	93%	52%	56%
34	39	経疏部７	1927/2/15	21	0	2	2	0%	0%	10%
35	36	経疏部４	1927/3/15	8	0	1	1	0%	0%	13%
36	42	論疏部３	1927/4/15	5	0	0	0	−	−	−
37	52	史伝部４	1927/5/15	19	8	3	11	73%	42%	58%
38	40	律疏部全／論疏部１	1927/6/15	18	4	0	4	100%	22%	22%
39	44	論疏部５／諸宗部１	1927/7/15	17	0	0	0	−	−	−
40	49	史伝部１	1927/8/15	14	8	1	9	89%	57%	64%
41	45	諸宗部２	1927/9/15	61	3	0	3	100%	5%	5%
42	30	中観部全／瑜伽部上	1927/10/15	21	16	5	21	76%	76%	100%

大正蔵					宮本				対大正蔵	
配本順	収録巻次	部門	刊行年月日	仏典数	採録	未採録	計	採録率	採録率	収録率
43	41	論疏部２	1927/11/15	3	0	0	0	−	−	−
44	46	諸宗部３	1927/12/15	46	2	0	2	100%	4%	4%
45	53	事彙部上	1928/1/15	2	2	0	2	100%	100%	100%
46	47	諸宗部４	1928/2/15	49	0	1	1	0%	0%	2%
47	51	史伝部３	1928/3/15	44	6	2	8	75%	14%	18%
48	18	密教部１	1928/4/15	76	18	4	22	82%	24%	29%
49	48	諸宗部５	1928/5/15	28	0	1	1	0%	0%	4%
50	20	密教部３	1928/6/15	184	0	101	101	0%	0%	55%
51	43	論疏部４	1928/7/15	6	0	0	0	−	−	−
52	21	密教部４	1928/8/15	228	0	121	121	0%	0%	53%
53	54	事彙部下／外教部全	1928/9/15	24	1	3	4	25%	4%	17%
54	19	密教部２	1928/10/15	126	0	59	59	0%	0%	47%
55	55	目録部全	1928/11/15	42	0	10	10	0%	0%	24%
			小計	2,275	822	591	1,413			

＜凡例＞

項目	略号	説明	計算式
大正蔵：仏典数	a	大正蔵各巻に採録される仏典の数	−
宮本：採録	b	大正蔵に採録される宮本の数	−
宮本：未採録	c	大正蔵に採録されていない宮本の数	−
宮本：計	d	宮本：採録・未採録の合計	b ＋ c
宮本：採録率	−	宮本の合計数に対して宮本が大正蔵に採録された割合	b ÷ d
対大正蔵：採録率	−	大正蔵の仏典数に対して宮本が採録された割合	b ÷ a
対大正蔵：収録率	−	大正蔵の仏典数に対して宮本（未採録含む）が収録される割合	d ÷ a

拙稿「『大正新脩大蔵経』の初版・再刊・普及版の刊行をめぐって」【表１　初版の配本順と校合者数】

配本順	巻	刊行年月日	校合者数小計	第一	第二	第三	第四	第五	燉煌寫經	知恩院天平寫經	醍醐寺萬德寺大德寺天平寫經	東寺觀智院其他古寫本	高野山麗藏
1	1	1924/4/8	17	8	3	1			1	1	1		2
2	3	1924/6/20	22	12	3	2			1	1	1		2
3	4	1924/7/15	21	11	3	2			1	1	1		2
4	8	1924/8/15	20	11	3	2			1	1			2
5	2	1924/9/15	22	12	3	3			1	1			2
6	5	1924/10/15	22	12	3	3			1	1			2
7	13	1924/11/20	24	14	3	3			1	1			2
8	7	1924/12/20	24	14	3	3			1	1			2
9	14	1925/1/20	29	19	3	3			1	1			2
10	6	1925/2/20	29	19	3	3			1	1			2
＊＊＊中略＊＊＊							＊＊＊中略＊＊＊						
47	51	1928/3/15	31	9	0	3	4	9	1	2		1	2
48	18	1928/4/15	31	9	0	3	4	9	1	2		1	2
49	48	1928/5/15	31	12	0	0	4	9	1	2		1	2
50	20	1928/6/15	31	12	0	0	4	9	1	2		1	2
51	43	1928/7/15	31	12	0	0	4	9	1	2		1	2
52	21	1928/8/15	31	12	0	0	4	9	1	2		1	2
53	54	1928/9/15	31	12	0	0	4	9	1	2		1	2
54	19	1928/10/15	31	12	0	0	4	9	1	2		1	2
55	55	1928/11/15	31	12	0	0	4	9	1	2		1	2

第一校合所（麗、宋、元、明藏）　芝增上寺閲藏亭
第二校合所（正倉院聖語藏天平寫經）　上野帝室博物館
第三校合所（舊宋藏東禪寺本）　宮内省圖書寮
第四校合所（倶舍唯識古抄本）　大和法隆寺勸學院
第五校合所（章疏宗典史傳其他）　小石川大藏學院校經臺

第49回配本で第三校合所が0名となる

【表３：大正蔵の校合体制の変遷】